

## Q 「つながり感通信」について教えてください

### A

つながり感通信とは

家族のような親しい間柄では、通常コミュニケーションのメッセージとしては利用されない非明示的な情報（声の調子、動き方、気配、存在やそれに伴うさまざまな背景情報：手掛かり情報）に日常的に接することで、相手を身近に感じたり、安心感（つながり感）が醸成されると考えられます。つながり感通信とは、このつながり感を遠隔地にいる人の間で伝える、NTTが提唱する新しい通信コンセプトです。

従来のメディア・コミュニケーションでは、明確なメッセージの伝達が重要視されていました。しかし、雰囲気や気配といったあいまいな情報もコミュニケーションを行ううえでの重要な要素となっています。例えば、とても親しい間柄では特に会話をしなくても、そばにいたり一緒に暮らしたりしていると相手の存在に付随する音や光や匂いなどで、その人とその人に関する情報が伝わることを感じます。しかし、転勤や単身赴任、あるいは大学生の一人暮らしなどで、離れて暮らすようになった場合、電話やEメールなどは利用できますが、伝えたい内容が特でない場合は、それらのメディアを使用することは少なく、一緒に暮らしているときに、意識の周辺（例えば足音など）で、ふと相手を感じることや、ちょっとしたサインをかわすことができません。このことは、親しみや淡い幸せ感といった「つながり」を感じる機会が少なくなるだけでなく、それが長期間続くことにより、互いの心的距離が遠くなる場合があると予想されます。このように、通常のコミュニケーションを下支えする、いわばバックグラウンドコミュニケーションと言うべき部分もコミュニケーションに重要な要素だと考えます。

NTTでは、通信メディアにより、互いの存在情報やそれに伴うさまざまな背景情報、軽いサインなどを送受信できる環境を提供することで、明示的なコミュニケーションを意識せずとも、ちょっとした幸せ感や身近さを感じることができ、親密な関係の維持・醸成が期待できるのではないかと考えました。これがつながり感通信です（図1）。

つながり感通信端末

つながり感通信で、送りあう手掛かり情報の1つとして考えられるのが存在情報です。存在情報を用いたつながり感

通信端末の例を示します（図2）。端末周囲には焦電型赤外線（人感）センサを複数個配置し、存在だけでなく移動方向も検出します。また軽い合図を送ることができるようにタッチセンサも設置しています。端末は常時接続ネットワーク環境下で、一方の端末が人の存在および動きを検出すると相手側の通信端末が光り、動きに応じて上部（花の部分）が回ります。またタッチセンサに触ると相手側で音が鳴るようになっています。デザインは、日常の生活空間の中に自然に溶け込ませるため、植木鉢型を採用し、家族関係を育むという意味でファミリープランタ（FP）と名づけました。この端末の特徴は、センサで取得された情報をそのまま表示するのではなく、普段の生活に馴染む形状と情報の

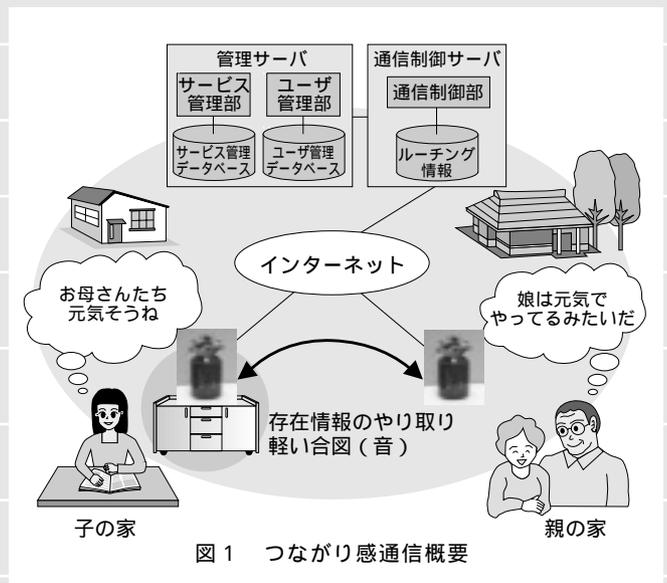
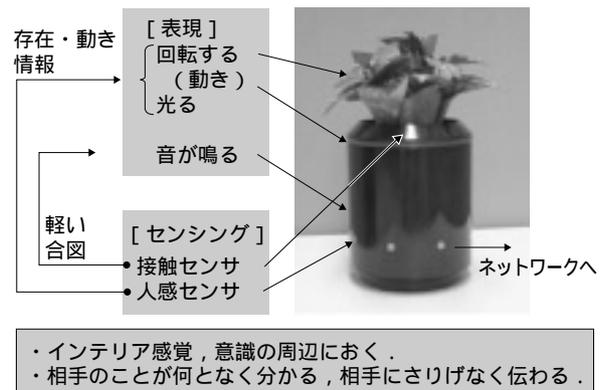


図1 つながり感通信概要



- ・インテリア感覚、意識の周辺におく。
- ・相手のことが何となく分かる、相手にさりげなく伝わる。

図2 ファミリープランタ

提示により、生活環境における偏在的な情報を伝えるメディアを目指している点です。さらに、端末は複雑な操作や設定は不要で、利用者はネットワークに接続するだけで利用できることも特徴です。

### 実証実験

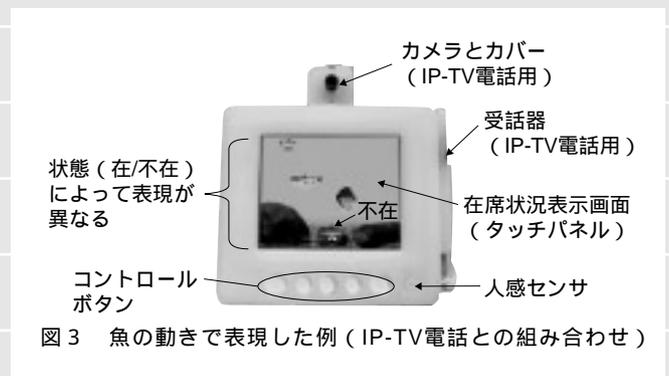
つながり感通信の効果を検証するために、高齢者と家族、遠距離恋愛の恋人たちなどを対象とした実証実験を行いました。ここでは、2001年7月から11月の間、富山県婦負郡山田村で行った実験について紹介します。本実験では、山田村に住む高齢者の方と、村外で暮らす4組8家族の方々の家にFPをそれぞれ設置し、普段の生活の中で日常的に使用していただき、インタビューやアンケート調査等により、主にシステムが人（利用者）に与える影響について調査しました。

モニターの方からは、「暮らしの中で、日々、相手の気配を感じるにより、家族の間で遠くの家族のことを話題にする機会が増えた」とか、FPの音で、「こんなにFPを連続して叩いて音を出すのは父親だ」となんとなく分かってきたり、光の動きで「母親が目の前を通ったのかな」と想像するという回答がありました。また懸念していたプライバシーに関して、「別に気にならない」という答えでした。実験結果から、背景情報のやり取りによって安心感や、にぎやかな感じが得られる等、つながり感通信の効果が確認できたと同時に、つながり感通信によるコミュニケーションは、人の想像力に依存する部分が大きいということが明らかになりました。このことは、従来のメディア・コミュニケーションで重要視されていた明示的なメッセージの伝達だけでなく、雰囲気や気配といった非明示的な情報が人と人のコミュニケーションに重要な要素となっていることを示しています。

### つながり感通信の展開例

つながり感通信を利用した近年注目されているサービスの1つとして、主に一人暮らしの高齢者を対象とした見守りサービスが挙げられます。現状の見守りサービスは、高齢者宅に設置したセンサからの存在情報や電気ポットの利用回数などをサーバ側で収集し、グラフ等で家族などに提示するものです。これらは高齢者側の情報を一方的に収集するもので、コミュニケーション的要素はなく、見守る側にメリットのあるサービスということができません。

ところがつながり感通信を利用したサービスでは、現状の見守りサービスと同じ機能を持ちながら、双方向で存在情



報を通信することによって、双方にある種の幸福感が得られることが期待でき、人と人とのつながりを重視した、高齢者側にもメリットのあるサービスを提供することができます。

また従来の音声・映像コミュニケーションとつながり感通信を融合したシステムも考えられます。例えばSOHOやオフィスなどにおいて、遠隔地にいる同僚とのコミュニケーション手段として、図3のようなIP-TV電話端末に存在情報を光でなく魚や鳥などの動きによる表現部を組み込んだ端末を用いて、遠隔地の同僚の存在情報を環境映像として表示しておき、必要に応じて映像や音声通信を行うサービスなどです。さらにNTTが推進するレゾナントコミュニケーションサービスにおいて、従来の映像コミュニケーションシステムに、つながり感通信のコンセプトを用いた「つながり感メディア」も提案されています。

つながり感通信は、現状の通信サービスが主目的としていない、手掛かり情報の伝達に光を当てることで通信サービスの分野拡大を目指したものです。今後、ブロードバンド環境下での新しい通信サービスの創出を目指して精力的に取り組んでいきます。

### 参考文献

渡邊・伊東：“温かいコミュニケーション～「つながり感通信」の誕生、” 共立出版、2003。

このコーナーで取り上げて欲しい質問をE-mailで編集部までお寄せください。  
 (社)電気通信協会内 NTT技術誌事務局 E-mail jrr@tta.or.jp